

インパクトコンソーシアム データ・指標分科会（第2回） 議論のポイント

【日時】令和7年11月5日（水）9:00～11:00

【場所】オンライン開催

【次第】

1. 開会
2. 事務局説明
3. ディスカッションメンバーによる取組紹介【環境分野】
 - 3-1. 農林中央金庫
 - 3-2. 株式会社環境エネルギー投資
4. グローバルヘルスのためのインパクト投資イニシアティブ【ヘルスケア分野】
5. ディスカッションメンバーによる取組紹介【ヘルスケア分野】
 - 5-1. オムロン株式会社
 - 5-2. Ubie 株式会社
 - 5-3. 日清食品ホールディングス株式会社
6. 事務局連絡/閉会

【ディスカッションメンバーによる取組紹介の概要】

〈農林中央金庫のインパクトおよび自然関連の取組について〉

プレゼンター：農林中央金庫 岡本メンバー

- 具体的事例について
 - 高松の事例は、農業事業に対して生産や流通/販売、市場拡大などを全面的・総合的に支援したものである。短期的には生産量と品質の安定、向上や販売単価の上昇が確認でき、今後各法人で働く農業従事者の所得が向上していけば、地域の生産量や産地としての地位も中長期的に維持・向上できるということを見える化したことで、関係者の共通理解の醸成やより効果的な対外訴求が可能となった。
 - 本事業の価値を再確認でき、特定した成果指標を用いて、PDCAを回していくことで、事業の着実な改善に繋がる。また、外部にも共有することで、コミュニケーションを取りやすくなるといった様々な効果があった。
- 自然指標について
 - TNFD¹が推奨する LEAP アプローチ²に基づいて、当金庫も分析を行っている。分析

¹ The Taskforce on Nature-related Financial Disclosures（自然関連財務情報開示タスクフォース）

² LEAP アプローチとは、Locate（発見する）、Evaluate（診断する）、Assess（評価する）、Prepare（準備する）のステップを踏む、自然関連課題の評価のための統合的なアプローチ。

および投融資先との対話に際し、ENCORE³というツールを用い、重要セクターを特定している。ENCORE ではバリューチェーンの上流から下流まで分析できるが、自然において重要なロケーションについては分析を深めることができないため、九州大学発のスタートアップである株式会社 aiESG と連携し、特に重要な生活必需品セクターを分解し、インパクト指標・要素ごとに、詳細分析を実施した。分析の結果、食品小売セクターは、米国の油糧種子事業へ依存していることが分かり、今後の投融資先との対話に活用することを考えている。

- 自然指標には単一指標が存在しないため、統計データと LCA⁴の手法を組み合わせることによって、EINES⁵という単一指標の作成にも取り組んでいる。

【ディスカッションメンバーによる取組紹介の概要】

〈(株) 環境エネルギー投資のインパクト投資〉

プレゼンター：株式会社環境エネルギー投資 森江メンバー

● インパクト投資の手法について

- シードからレイターまで様々なステージの投資先があるが、全ての投資先でインパクトを定量と定性の両方で評価する。定性評価として、Five Dimensions of Impact を用い、5つの観点から評価をし、定量評価として、IRIS+やスタートアップが算出できる情報を用いて、インパクト KPI を設定している。
- 抱える悩みとしては、インパクト可視化において、フードロス削減から、どの程度 CO₂ 排出削減に貢献しているかといった環境効果や健康効果における統一的な係数が存在しないため、各社独自の項目で評価せざるを得ず、当社のインパクトレポートにおいて、CO₂ 排出削減量のように纏めることが出来ない。

● インパクト達成状況および期待インパクトについて

- 5-10 年後にどの程度事業が立ち上がっているかを見越して投資をしており、創出される期待インパクトの累計値を算出している。
- 当社の定量インパクト測定の特徴は、スタートアップ企業の事業計画に紐づいている点である。インパクト KPI が財務的 KPI と正の相関関係があることを前提に、事業が成長することで、インパクトの創出も増加すると考えている。
- 当社は環境領域特化型だからこそ、厳密に区別して書くべきではないかという考えもある一方、インパクト測定結果の可視化やレポーティングのしやすさの観点では、可能な限り纏めるべきではないかとも感じ、何をどこまで集約すべきか、ど

³ Exploring Natural Capital Opportunities, Risks and Exposure の略で、自然関連リスクへのエクスポージャーを調査し、自然への依存とインパクトを理解するためのツール。

⁴ Life Cycle Assessment

⁵ 生物種絶滅リスクの増加を示す指標。例えば、0.021EINES/年であれば、事業により年間 0.021 種の絶滅リスクを生じさせていることを表している。

これから区別すべきかが悩ましい。

【ディスカッションの概要】

〈環境分野のプレゼンに対するコメント〉

- TNFD の 9 つのグローバル中核指標に EINES の指標を併記して開示することで、よりネイチャーポジティブの実感がある指標になるのではと感じている。時間軸の幅を持った開示という点でも、非常に有効な指標と考える。一方、算出難易度が高いのであれば、(今後、本分科会で取りまとめる) 指標集に掲載するハードルは高くなるのではと考える。
- Financed Emissions の算定で一般的に用いるような、投融資を行っている債券や株式、企業の資本・負債データなどのインプットデータが揃えば、EINES を算出することが可能。農林中央金庫としても、まずは算出することを重視しているため、内閣府の助成事業の中で EINES の活用方法を実証している。企業にどのように活用いただくかもポイントになるため、そこも踏まえて活用方法を検討したい。
- 今回は主にポジティブインパクトについて言及されていたが、例えば太陽光パネルの製造に伴う人権問題や森林伐採など、ネガティブインパクトの緩和はどうされているかもお聞きしたい。
- 環境エネルギー投資では、人権を含めたネガティブインパクトについては、インパクト評価の中の Five Dimensions のリスクに沿って、どのような潜在的な又は顕在化しているリスクがあるのかについてスタートアップと対話をしている。その中でリスクがあると認識しているものについては改善を促し、毎年のモニタリングでフォローアップを実施している。

【ゲストスピーカーによる取組紹介の概要】

〈グローバルヘルスのためのインパクト投資イニシアティブ (Triple I) インパクト測定・マネジメント〉

プレゼンター：内閣官房 健康・医療戦略室 志摩氏

- インパクトの測定・管理について
 - グローバルヘルス分野で IMM に取り組んでいる Triple I のパートナー、外部から招いた有識者の方々と、IMM の実態把握と実践知の体系化を目的として、計 8 回ワーキンググループを開催し、インパクト投資のための実務者ガイドと、IMM 実践・調和に向けた政策提言を発出した。
- IMM 実務者ガイドの概要について
 - IMM 実務者ガイドは、グローバルヘルス分野において、インパクト投資を効果的に実施するための実践的な枠組みを提示している。また、投資ライフサイクルにおいてインパクトの考え方を統合していくこと、製品開発・サービス提供のライフ

サイクルにおいてインパクト創出の取組をしていくことの重要性についても発信している。指標に関しては ESG の“E”の分野では、CO₂ 排出量という 1 つの大きな柱が存在する一方で、“S”の分野、特にヘルスケアでは指標が多様化しており、アウトプットからアウトカムをインパクトに繋げるという点において、実務者は指標やロジックモデルへの取組に多数の課題を感じている状況にある。

- データ指標分析に基づいた指標例の収録なども実施している。IMM 標準化に向けた 6 つの政策提言では、投資家・政府機関・NGO など多様なステークホルダー間における既存の IMM の調和に向けて、官民対話やパートナーシップの構築、ステークホルダー協働のためのネットワークの形成等に関して提言をした。
- 特に今後、提言書やガイドを使って実際にどのように進めることが、グローバルヘルス領域におけるインパクト投資促進のより一層の貢献に繋がるのかを考え、多様なステークホルダーと連携をしながら、継続して取り組んでいきたいと考えている。

【ディスカッションメンバーによる取組紹介の概要】

〈事業を通じた社会的課題解決と社会的インパクト可視化の取組〉

プレゼンター：オムロン株式会社 萩原メンバー

● オムロンの価値創造モデルについて

- インパクト算出の仮説モデルを構築した上でロジックモデルを作成し、開示・ストーリーにつなげていくことに取り組んだ。しかし、リサーチにおいて、ロジックモデルを設計するための文献が少ないことや血圧計による社会的インパクトが医療費低減につながると断言できないことが課題として挙げられた。
- 製品インパクトはインパクト算出の型が決まっておらず、データの取得やロジックモデルの作成が困難である。特に個社でロジックモデルを作成する際はその納得性、妥当性を見い出すことが難しく、社内でサステナビリティ開示におけるインパクト算出・可視化の意義に対して理解を得ることが難しい。
- 個社でかけられるリソースには制限があり、活動の範囲には限界がある。インパクトの可視化は世の中的にもチャレンジ段階にあると考えており、可視化が終わったものを開示するだけでなく、そのプロセスにおける問題点などについて有識者やインパクトの可視化に取り組む方々と協業していくことで、インパクト可視化の取組をより意義あるものにすることが有益なのではないかと考える。
- インパクト可視化や（財務指標と非財務指標の）コネクティビティ分析の実施は、社外だけではなく、社内に対しても取組の価値を訴求する意味があり、様々な側面において取り組む価値があると考ええる。

【ディスカッションメンバーによる取組紹介の概要】

〈Ubie 株式会社での IMM の実践〉

プレゼンター：Ubie 株式会社 守屋メンバー

● IMM の取組について

- IMMに取り組むきっかけは、ビジョン・ミッションが十分に浸透していないことへの課題意識である。
- ロジックモデルの作成にあたり、当社では個別の事業単位ではなく、Ubie 株式会社という会社全体で、どのような形でリソースをアウトカムへ繋げていくかという絵を描くことを目的としている。
- 使用している指標群は、サービス・事業開発の中で日々測定・マネジメントする数値として機能しており、インパクトに紐づく指標とアウトカムに紐づく指標を並べている。ポイントとしては、ビジョン・ミッションを起点に成長を加速していくような段階のベンチャー企業として、ビジョン・ミッションとの接続性を最重要視して、指標を設定した点である。
- ヘルスケア領域においては、アカデミアでの医療経済評価に関する先行研究が豊富である。企業の非財務の可視化・開示という点で、どこまで取り組み、指標を取り入れるのが難しいと感じている。
- いかに生活者の健康寿命の延伸を支えていくかを重要視し、QALY⁶を参考にしている。QALY を貨幣換算するといくらなのかといったベンチマークも用いつつ、健康寿命延伸のインパクトを算出する取組を実施している。

● ステークホルダーとの対話について

- インパクト指標やロジックモデルを対話に用いる際に、ステークホルダーごとにチューニングしながら発信することは、非常に重要と考える。レポートに加え、コミュニケーションで補填を図っていくことと、そこから逆算したような指標の設計が重要と考えている。

【ディスカッションメンバーによる取組紹介の概要】

〈日清食品グループの企業価値・社会価値の定量化について〉

プレゼンター：日清食品ホールディングス株式会社 齊藤メンバー

● 非財務取組と企業価値・社会価値の定量化について

- 社会価値の分析についてはインパクト加重会計の手法を採用している。インパクト加重会計については、パーム油（ヤシの油）について分析をしている。パーム油は、貴重なコモディティである一方、ESG リスクが非常に高いと言われているため、持続可能なパーム油の調達を行うとともに、調達が与える生産地へのインパクトをポジティブ／ネガティブ両面で算出している。

⁶ Quality-adjusted life year（質調整生存年）。生活の質を考慮した生存年を意味する。

- インパクト投資から見た健康・栄養の取組について
 - 健康、栄養などをすべて定量化し、改善につなげていく仕組みを NPS⁷と呼び、それを用いて KPI の目標を設定している。会社全体として、トランス脂肪酸、塩分摂取への対応や NPS の活用による栄養改善などの取組を実施しており、この活動においては PDCA を回していくことが求められるため、栄養ポリシーの策定を含む国際的な潮流を反映した方針を用い、運営している。
- ロジックモデルの策定と KPI の設定について
 - ロジックモデルの策定及び KPI の設定にあたり、ベースとなるのは当社の経営の柱である Mission・Vision・Value である。アウトカムは当社の創業者精神と紐付けられるべきと考えており、アウトカムの達成に資する KPI を設定し始めている。よりシンプルなロジックモデル、KPI を見つけていきたいと考えている。課題として、当社はダイレクトに健康に資する企業でないため、KPI のデータを選択しづらいことが挙げられる。

【ディスカッションの概要】

〈ヘルスケア分野のプレゼンに対するコメント〉

- 指標が多様化する中で、「何を選択していくか」は、「何を目指しているか、何の課題を解決するか」に紐づくと考え。今後データ・指標分科会として、データ・指標集を公表するにあたり、これらはセットで示していくことが非常に重要であると考え。
- 問題意識としては、定量化された社会インパクトそのものを見るだけではその数字の大きさがイメージしづらく、大小の判断がつきにくいという点と、エビデンスの検索を個社で実施することは困難であり、リソースも限られるという点が挙げられる。様々な公的データや論文、研究などがその経過や結果、信頼度などとともに一覧化・オープン化できると望ましいのではないかと。
- 上場企業においても、社会的価値を意識した開示が徐々に増えてきているものの、実績の振り返りなどが中心であり、インパクトを事業戦略や社会/企業価値の創造に繋がられていない企業が多いと考える。インパクトは定量化や把握ではなく、戦略への活用が重要であり、本日の内容は多くの企業の開示の参考になると感じた。社会的な貢献度が高い事業であっても最終製品を作っていないことにより、インパクトの把握が困難であるという点に共感した。

⁷ Nutrient Profiling System (栄養プロファイリングシステム)